

古代蝦夷の反乱

7世紀から9世紀初めまでの古代において大和朝廷がどのようにして東北に侵出して行ったかを見てみます。

東北の中には^{えみしこく}蝦夷国はありません。東北では当時和人が^{えみし}蝦夷と呼んだ人々が住んでいました。数百人単位での地域部族単位での行動です。もっと小さい部族もあったでしょう。奈良時代末に部族同盟ができ、大和朝廷に反乱を起こしましたが、兵力で2千から3千人位でしょう。最大の反乱です。

7世紀中頃から大和朝廷（以後朝廷と称します）は東北への侵出の積極策に出ます。

それまで蝦夷とは朝貢や商取引もあり、友好関係にありました。

しかし気候が温かくなり、東北の北部、中部地方にも水田稲作が可能になりました。

更に百済に味方した白村江の戦いで唐、新羅連合軍に敗れ、朝鮮半島での地盤をなくしてしまったこともあり、東北への侵出に力を入れたものと思われま

す。具体的には次のように進めました。

当時今日のような県制はありませんが分かりやすいので県名で地域をしめします。

太平洋側からです。すでに福島県（会津を除く）と宮城県阿武隈川河口の南側までは朝廷は統治していましたので、7世紀の中頃に陸奥国を打ち立てました。

7世紀末までに仙台平野に侵出し、8世紀初めには仙台平野、大崎平野（仙台平野の北）にいくつかの^{じょうさく}城柵を設け関東等から移民を入れ水田稲作を行います。従う蝦夷にも水田稲作を指導します。

郡制を施行します。新たに仙台平野に黒川、賀美、色麻、牡鹿等10郡を設けます。

原住民の蝦夷は朝廷に従属する部族と反抗する部族に分かれます。反抗する部族は関東からの移民団と衝突し、朝廷に抵抗します。

蝦夷には政治的配慮と軍事制圧の両面作戦で対応します。

政治的配慮とは従属した蝦夷には食糧、鉄製品、位、称号（外従五位下等）を与えます。反抗や反乱を起こす蝦夷には軍事制圧を加えます。

抵抗した後に投降した蝦夷は^{ふしゅう}俘囚と称し、関東等に百人、数百人単位で強制移住させました。

8世紀初めに陸奥国を陸奥国、岩城国、岩成国に分割しますが、数年で又陸奥国一本にします。開発前線の大崎平野の蝦夷の反抗を抑えるための軍の補給は一国体制が良いとの判断で戻したのでしょう。

以後江戸時代まで東北は陸奥国と出羽国の二国体制です。

城柵は東北侵攻のための前線基地です、周りを木の柵や築地で囲み、政庁を設け軍団が駐屯します。

この城柵（柵）には柵戸（さくこ）が所属します。関東等からの水田稲作の開拓団です。屯田兵のことです。城柵を中心に水田の開拓を行います。普段は農民ですが蝦夷の反乱に対しては兵士となります。（柵は古くは「き」、一般には「さく」です）

この頃は水田稲作に反対の蝦夷と開拓団（柵戸）や稲作賛成の蝦夷とのトラブルが多かったのです。

^{あぜち}按察使（国司より上の奥羽、出羽の管轄行政官）が殺される事件が起きます。

朝廷は宮城（県）の統治強化のため、仙台平野に多賀城を築き奥羽（福島、宮城）の最大拠点とします。ここに按察使、国司（陸奥守）そして鎮守将軍（関東等から招集した兵士の最高指揮官）を配置します。

次に日本海側からの大和朝廷の侵出です。7世紀中頃は^{こしのくに}越国（後に越前、越中、越後に分かれる）から山形、秋田に向かつての北上です。

当時は新潟県の阿賀野川河口あたりは蝦夷の居住範囲でしたが、ここに先ず城柵を設けます。（^{ぬたりのき}湍足柵—新潟市）

そして越守（越国の長官）の阿倍比羅夫が山形、秋田、青森に向かつて3年間に三度遠征します。日本海を200艘の舟を仕立てて各地に上陸します。これは征伐と言うより朝廷の権威を見せるデモンストレーションと言えるでしょう。

蝦夷を集めて饗宴もしました。お土産もあったでしょう。

山形県の庄内平野まで侵出したところで、8世紀の初めに^{出羽国}を設立しました。(平城京へ遷都のころ)

その後城柵の先端は秋田(市)まで侵出します。出羽国の範囲は山形県と秋田県の範囲に広がります。

城柵での経営は上記しました陸奥国と同じです。蝦夷の水田稲作の普及、柵戸(移民集団)の水田稲作の開拓です。

しかし出羽の地も水田稲作になじまない蝦夷(従来の狩猟、採集、漁労生活一山夷)と移民団・水田稲作を受け入れる蝦夷(田夷)とで争いが生じます。

この7世紀半ばからの朝廷の東北侵出の積極策が蝦夷と各地で戦いとなり、8世紀の初め(平城京遷都の前後)按察使や大掾(朝廷から派遣される国司で、守、介に続く三等官)が殺される事件もあり、朝廷は鎮圧に躍起になります。

やっと蝦夷の反乱が一旦は収まりましたが、8世紀の後半になり又再燃します。

朝廷が岩手(県)侵出を目論んだ時です。

奈良時代の終わり頃です。この乱は20数年間続き有名な坂上田村麻呂によって制圧されます。

この人の名前は良く知られています。戦った相手が蝦夷の族長阿弭流為^{あてりゐ}です。教科書にも載っていますし、この二人の戦いは高橋克彦作の小説「火怨」(1999年)で有名になりました。

朝廷は宮城(県)をほとんど統治下にしました。次は岩手県へ侵出を目論みます。

8世紀半ばになって、新たな城柵を宮城(県)と岩手(県)との境(宮城県側)あたりに新造します。百生柵(モモオノサクー牡鹿半島の北)と伊治(コレハル又はコレハリー大崎平野の北)柵です。又秋田(県)と岩手(県)の境に雄勝柵を設けます。

武力を前提に強引な侵出計画と言えるでしょう

岩手(県)の蝦夷の多くの族長と朝廷とは友好関係にありましたが、朝廷の直接統治に抵抗する族長もいました。

朝廷は水田開発に協力し、統治下にはいた蝦夷の族長には位や称号を与え、

地域の支配を委ね優遇します。政策的な配慮もしました。

中でも牡鹿郡の道島一族は朝廷で官位をもらい統治下蝦夷の筆頭でした。

しかしこの統治下にはいった蝦夷間で待遇の差でもめて対立が出来ます。

これにより朝廷統治の宮城（県）で蝦夷が反乱を起こし、更に統治外の岩手（県）の蝦夷が大々的に反乱起こります。

鎮圧には9世紀初めまで28年間反乱状態が続きます。

これが朝廷への蝦夷最大の反乱、抵抗なのです。

先ずきっかけは官吏になっていた族長の蝦夷が処遇に不満か、新たに作った百生城柵を攻撃しました。

朝廷は坂東に動員令を出して鎮圧に努めました。

一方出羽国では未だ統治できていない志波（盛岡市）に侵出しましたが、蝦夷に敗戦しました。強引な侵出に無理があったと言えます。

次に新たな城柵^{これはる}伊治において地元の蝦夷^{これはるあざまる}伊治^{これはる}皆麻呂が東北の最高行政官である

按察使の紀^{あぜち}の^{きの}弘純^{ひろずみ}と牡鹿郡大領^{みちしまおだて}の道島大楯氏（蝦夷で国府の官吏）を謀殺したのです。

皆麻呂も国府の官吏になっていました。

理由は道島氏が皆麻呂を蔑んだこと、それを紀弘純が同調したことと言われています。どうも蝦夷の仲間同士の喧嘩が元で按察使も殺してしまったようですが、皆麻呂もここまでやっつけてしまえますと止められません。国府の多賀城も攻めて焼いてしまいます。

この事件は岩手（県）の蝦夷の反乱の引き金になります。朝廷が岩手県を統治下に置こうと行動していること、伊治城柵、多賀城が簡単に破壊されたことから抵抗、反乱に立ちあがったのです。

岩手（県）の蝦夷も各地にいくつかの族に分かれています。これまでの蝦夷は地域部族間の同盟は少なかったのですが、今回は胆沢^{いざわ}（岩手県水沢市）の蝦夷の族長阿弋流為^{あてりい}が岩手（県）のいくつかの蝦夷の族と同盟を組んで朝廷に抵抗してきました。

阿弋流為の姓は大墓公^{たものきみ}です。公^{きみ}がついているので朝廷より友好の蝦夷一族と

してそれまで処遇されていたと思われます。

胆沢は現在の水沢市で、当時の朝廷統治の宮城（県）から岩手（県）に入っ
てすぐの衣川（平安時代に栄えた奥州藤原氏の本拠）の北側です。

胆沢は岩手県への侵出の蝦夷地域の拠点です。

阿弭流為は北部の志羽等の蝦夷に呼びかけ同盟を組み朝廷軍に対抗します。

その頃には朝廷軍は10万の兵力を取りもどした多賀城に集結させ、胆沢城
に討ってでます。

しかし胆沢で阿弭流為軍のゲリラ戦にあい、大敗をきします。敵を甘く見た
のでしょうか。実際には6千の兵力しか投入せず負けました。蝦夷の兵力は3千
位と言われています。蝦夷は強いのです。

朝廷は軍を立て直し、征東大使に大伴弟麻呂、副使に坂上田村麻呂を起用し
て阿弭流為に当ります。

決着がつきませんが、朝廷では坂上田村麻呂の善戦が評価され、坂上田村麻
呂を按察使、陸奥守、鎮守将軍に任命して対応させます。

伊治咩麻呂事件以来20数年がたっています。

朝廷軍は5万の兵を準備しています。坂上田村麻呂は蝦夷に和平を呼びかけ
ます。

阿弭流為が盟主の同盟は長期戦で持たなくなりました。解体の方向です。

ついに8世紀初めに阿弭流為は降伏しました。阿弭流為は都（平安京）に連
行され処刑されました。

これで坂上田村麻呂は征夷大將軍に任命され名声は歴史に残りました。

この後桓武天皇の東北の侵出政策は取りやめとなりますが、その後いくらか
蝦夷との小トラブルはありましたが、朝廷は秋田と志波（盛岡市）の線まで統
治地域を北に伸ばしました。

朝廷の東北侵出（統治）政策は宮城県北部と秋田県で反抗にあい、岩手県へ
の侵出は20数年及ぶ戦争状態を経て統治出来ました。

この後にも東北で前九年・後三年の役、や奥州藤原氏の奥州合戦があります。

これは朝廷と蝦夷との戦いというより朝廷統治下での権力闘争と言えるでし
ょう。

これについては別稿としたいと思います。

以上

2020年2月11日

梅 一声



東北古代史関係地図

「阿弭流為」樋口知志著 2013年 ミネルヴァ書房より転載図